

「周辺のなこと」「偶発的なこと」からの保育の再構成

浜 口 順 子
(十文字学園女子大学)

保育における子ども理解は、原因や目標を一時たなあげし、状況のなかの生きた文脈から子どもの全体像をとらえ現象の意味を読み解くことを可能にする。このいわば状況的な理解の様式が、保育の枠組み理解とその再構成においてどう生かされるのかを考える。

1. 保育事象のなかの周辺性、偶発性

【周辺性】 大人が家庭、幼稚園、保育所などの保育現場で子どもとかかわるときに、「保育空間」、「保育時間」、「保育者」などについて、ある前提となる意識の枠組みがある。先入観ともいえる。たとえば、幼稚園や保育所の保育空間といえば、まず園舎と園庭がその中心として考えられ、通園路、地域の児童センター、近隣の商店街などは、まったくの外部ではないが、同心円的に徐々に遠ざかる周辺の(marginal)空間として認識されるのが一般的であろう。保育時間でいえば、通常の(中心的な)保育時間の周辺に、預かり保育や早朝保育が「くっついている」というような感覚がふつうではないだろうか。運動会や遠足、「父親参観日」などの保育を日常の保育とどう関係付けるのかという問題設定には、それら特別行事の周辺性が表れているといえる。保育にかかわる人としては、やはり「保育者、子ども、親」が中心であり、栄養士や調理師、事務職員、運転士などは周辺の存在であろうし、医師や保健婦、カウンセラー、福祉関係専門家、地域の多種の協力者、実習生、行事などの際に不定期に来訪する業者なども「周辺」に位置づけられているはずだ。

中心と周辺という区別観念があるのがよいとか悪いとかをいおうとしているのではない。人が社会の中で生活するうえで、多種多様な「中心／周辺」的な感覚をもつことは避けられないことである。そのなかで「中心」と「周辺」とは価値的に対等な関係ではなく位階性があることも事実である。一般的傾向として、社会的諸関係の生成運動の中で、周辺との関係を織りなすことよりも、中心のバランスを保とうとする力がより大きく働きやすいということも避けられないことであろう。中心は安定的、持続的で、人間活動の「ありそうな」「予測可能な」ストーリーの文脈の底流をなしている。それに対して、周辺のなものは、枠外、例

外、枠外・・・などの「外なる」ものとして、安定的な居心地よさを破るものとして傍らにある。

中心のなかにもまた「中心／周辺」の勾配はあり、たとえば、「問題児」「気になる子」という見え方や、統合保育のなかで周辺的存在になりがちな「障害児」などは、「安心して見ていられる子」の周辺に位置している。通常の保育時間内という「中心」の内側にも、通園バスのコース別の時差を「埋める」時間、トイレや手洗い、身体測定などの周辺の時間があるといえよう。

【偶発性】 「周辺性」という越境的な関係性をヨコのものとした場合、もう一つ、「偶発性」contingency という無前提の遭遇的な出会いをタテのものとして、交差的に考えることができる。偶発・偶然には accident (事故、事件)としての突発的な出来事、chance としての画期的な時間、out of expectation / intention としての意想外・案外な事象との出会いなどが含まれる。たとえば、保育中に子どもが大けがをして日常の保育が寸断される場合。また「あのととき偶然すずめが保育室にはいってこなかったら・・・」「あのときたまたまあの絵本を見つけたから・・・」というように、保育の流れにとつぜん転機をもたらすモノやコトとの出会いもそうだ。(実は珍しいことではない。)子どもの予想外の反応や成長に驚かされ、子どもへの見方が一新すること多いだろう。保育者の感覚としては「驚き」や「不思議」として形容されるような体験である。これは、日常的に保育に対して抱いている、意識の構えとしてのストーリー展開を外から侵害されるように感じるという点で、「周辺の」事象との関係と同様の、不安定さ、不確実性を有している。

2. 「周辺の」「偶発的」事象にどう対応するか

精神科学的教育学者ボルノーは、了解された世界に新たな理解を招来する契機として「危機」の重要性を論じている。保育の「周辺の」「偶発的」(なこととして気づかれた)事象とは、この意味で、保育者が状況とかかわりなく保守的になろうとしている場合に出会う、望ましい「危機」として果敢に取り組まれるべき

問題である。その危機の意味を理解することで、ただそれらを「取り込む」（いたずらに同心円的な拡大解釈してみせたり、偶発事象を「例外」として特記してすませる）のとは違う関係性を模索し、中心軸をずらしながら自らのアイデンティティを再構成する可能性に開かれる。

保育実践が、計画通り、予想の範囲内で、一定の流れを乱さずに進行している場合、周辺的事象はすでに了解済みの中心的枠組みのなかに取り込まれている状態と考えることができる。しかし、そのような状態は仮想的で、実際の保育現場はつねに周辺の事象とかかわり、既存の価値体系に揺らぎをもたらす偶発的事象にさらされている。その結果中心的領域に変化をもたらさない様式としては、「排除」「付加」「收拾」「留意」「慣習化」などが考えられるが、それに対して「関係」「価値観の変化」「理解」などは、保育現場のあり方を再構築する上の契機となる。周辺・偶発的な事象によって、それまでの保育の枠組みに変容をきたす場合があるのだ。

たとえば、実習生という周辺の保育者を一時的な付加物とみなすか、日常化した現場の雰囲気を活性化する存在として位置づけるかの違いがある。また、預かり保育を現状追認のように実施するか、あるいは通常保育とのあいだに有機的な連関付けをし、そこから園の保育方針や保育内容を再構築する展望をもちうるかどうかという分岐点にもなる。

「偶発的な」事象についても、それが一過性のものとして対処されるか、その後の保育へのかけがえのないきっかけとして活用しようとする自由さがあるかという視点の違いとして表れる。ある幼稚園の運動会のリレーで、練習ではいつも遅かった組が1等でゴールした。しかしそのあと、最後から2番目の走者とアンカーが間違えて順番を入れ違いにしていたことが判明し、先生たちの協議の結果、その組はビリにされた。

「ルールを守る」ことが大切だという価値観を第一に据えるという教育的姿勢をいちおう是としても、幼児期の子どもにそのことが「厳格な判定」という方法で伝えられるべきものであるのかは問われるべきである。ともに喜ぶ体験、努力をたたえる体験を重視する価値観に立てば、たとえば1等が2つというような融通性のある判断もありうるだろう。まずは子どもの心に添って、その後の保育にどうつなげていくのかという視点をもつならば、「困った」ハプニングも既存の競技ルールや価値観を相対化する絶好の機会となる。

3. 「非」周辺の・偶発的事象への問いをもつこと

家庭保育に目を向けると、都市化現象のなかでの育児の問題性が浮上し、母親グループ、保健所や保育所等の各種の専門家など「地域」とのゆるやかな連携が不可欠の時代になってきている。また家庭形態の変化の中で、常識的には保育の「中心」とされる家庭という場の内部にも「母子—その周辺」という分化や、あるいは「父親の不在」という関係の変化が見られる。このような時代状況に応じた「中心／周辺」性の変化があることを前提とした上で、さらに考えなければならないのは、「周辺の・偶発的」だという認識じたい、その基準におかれている「中心的・必然的」な状態にかかっているということである。

保育の場合とは、保育者とは、保育内容とは・・・などの原理的な認識はそれとして必要であるが、その必要性はそれをつきくずそうとする周辺の・偶発的事象に対して、ある態度をとる基盤を準備するものとして、という限定つきのものである。その意味で保育において偶発的でないものは何かといえば、保育実践体験をふりかえり省察しまたそれを実践に返すという保育的行為の連鎖じたい、ということになる。周辺の事象と感じられる事象は、実はつねに中心的事象からの照射としてあらわれ、中心的な事象は周辺の事象との対照で明らかとなる。この過程は、日常的な思考と省察との反復的・らせん的展開をたどるものだ。

たとえば「障害児」について、標準的発達（健常児）という「中心」に対する「周辺」的存在だとする見方に立つと、「社会適応」を目的としたかかわり方になりやすい。しかし「〇〇ちゃん」というひとりの子どもとしてかかわってみて「障害」として映る存在様式が「〇〇ちゃんのあり方なのだ」と理解できるようになると、そういう育ち方もひとつの中心としてとらえられるようになる。そのような視点をもつことによって、標準からの逸脱幅をきづかう見方（発達の視点）を相対化し、人が育つということを「関係性」から問い直すという見方へと保育観を再構築していくことになる。これは「育ち」という言葉に示唆されるところの、保育学的な発達論の組み換えともいうことができる。

原理、原則、規範、法則性、習慣などはみな、「周辺の・偶発的なこと」に触れて、状況的に真なるものかどうかを問われる。保育の省察が中心志向性（内向性）へのふりかえりを含むことで、境界をこえて開かれる保育へと結びつく。

〈参考〉ボルノー、O. F. 「認識の哲学」理想社